

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 1章 10～17 節

○コリントの信徒への手紙一の緒論でも触れたが、この手紙はコリントの教会から口頭や手紙で問い合わせのあった諸々の問題にパウロが答えている牧会的な手紙に他ならない。しかし、パウロは教会からの質問に具体的に答えていくに先立って、まず自分が聞き知った教会内の不和について触れ、教会員間の一致を説く。

【注解】

○「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。」(10 節)

・パウロはまずコリント教会の人々に「兄弟たち」と呼びかける。同じ「主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた」(9 節)者同士の信頼関係の中でパウロは教え諭すのである。

・それは「主イエス・キリストの名によって」為される。当時、名は人格を表すものだった。したがってこの勧告はパウロによって為されているものの、究極的には主イエス・キリストの勧告として受け取られるべきものであったと言えよう。

○「皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。」(10 節)

・このようにパウロは三通りの方法で教会の一致をお願いする。

① 「勝手なことを言わず」(「みな語ることを一つにし」とも訳される)

→だれかれの差別なく、教会の全体性を強調しながら信仰告白を共にしなさいという意

② 「仲たがいせず」

→この「仲たがい」という言葉は、教会内に異端的な党派が乱立して抗争、分離するというような意味ではなく、教会内における深刻な意見の相違を意味すると考えられる。

※実は「仲たがい」と訳されている言葉が「分裂」とか「分派」とも訳せることから、コリントの教会にそうした党派が存在し、深刻な分裂抗争が存在したとして、それぞれの党派の神学を再構成しようとする努力も神学者の間で為されてきたのだが、教会が直ちに分裂するほどのそのような対立があったとは歴史的に考えにくく、現在ではあまりそ

のように考えられてはいない。そこまでのものではなく、実際は個々の会員がグループに分かれて、後に出てくるような勝手な自己主張を言い合って不和を生み出していたという程度のことだろうと思われる。

③「心を一つにし思いを一つにして」

→パウロはこのようにして、福音によって明らかにされた神様の御旨に堅く立って、教会の内外に生じる具体的な事柄に対し同じ判断、意見を持つように勧める。

以上、三通りの仕方でパウロは「固く結び合いなさい」とコリントの教会員に願う。

○それは、「あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされた」(11 節)からだった。

・「クロエの家の人たち」

→クロエという女性の子どもたちか、親族か、奴隷かはっきりしない。しかし、パウロやコリント教会全体が十分信頼するに値する人々であると認めていたことは確かである。

・「あなたがたはめいめい、『わたしはパウロにつく』『わたしはアポロに』『わたしはケファに』『わたしはキリストに』などと言っているとのことです。」(12 節)

→クロエの家の人たちからの報告によれば、コリント教会にはそれぞれ勝手なスローガンを立てて自己主張をする人々がいた。

・「わたしはパウロにつく」とは、アポロの宣教方法にひきつけられ(cf. 使徒言行録 18 : 24~28)、彼を指導者として「わたしはアポロに」と主張した人々に対して、パウロを重んずると自認した人々のスローガンと思われる。しかし、パウロには自分はいくつの人々のリーダーであるという自覚はない。こうした人々を是認してもいない。彼らは勝手にパウロの主張を誤解、曲解した上で担ぎ回っている人々に過ぎない。

・またアポロはアレクサンドリア出身の雄弁家として初代教会の中でよく知られた説教者だったが、パウロの同労者であって、彼がパウロと対立し、主導権争いをしたというような記録はない。

・「ケファ」は「ペトロ」のアラム語読み。ガラテヤの信徒への手紙 2 : 1~10 から、彼とパウロ、両者の間にある種の対立が存在していたことは事実のようであるが、パウロにとってペトロやエルサレム教団との関係は極めて重要であり、彼の異邦人に対する宣教活動が救済史的に意味を持ちうるのは彼らとの友好的な兄弟関係による。したがってパ

ウロにつく者たちとケファにつく者たちの対立は決してパウロの意図によるものではなかつたろう。コリントの教会員は「パウロ」、「アポロ」、「ケファ」に関係なくこれらの人々を担ぎ、お互いに自分勝手な主張をして対立していたのである。

- ・「わたしはキリストに」→キリストを引き合いに出して自己の正当性を主張していた人々。
- ・このようなコリントの教会の仲間割れの状態をパウロは強く批判する。

○「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。」

(13 節)

- ・上記のような教会員の状況に対し、「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」とパウロは問う。そして言外に「いやそんなことは決してない。キリストは一つ。教会はキリストの一つのからだなのだ」と迫る。教会はキリストのからだであり、教会員がそれぞれのグループに分かれて仲間割れしている状態は、キリストのからだの各部分を有機的に結合しないでバラバラにしてしまう結果になるのである。
- ・「パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか」という問いは、アポロやケファの場合についても当てはまる。イエス・キリストが私たちのために十字架につけられたのであって、使徒たちの役割はこの事実に従属するものであることをパウロは再確認する。
- ・「あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか」
J・ダンという神学者は、「……の名による」とは、商業都市コリントの人々にとって親しみ深い、所有権の変更を示す商取引上の表現であると語っている。キリストの名によってバプテスマを受けた者はキリストの所有であって、キリストにのみ忠誠を尽くす契約を立てたのである。キリストとキリスト者のこの堅い交わりの保証として聖霊が注がれる。(cf. コリントの信徒への手紙一 6 : 19)

○14～16 節：パウロはコリントにおいてごく少数の人々にしか洗礼を授けなかったことを神様に感謝する。その理由はヘレニズム世界の神秘宗教の中に見られるように、洗礼を授けた者と受けた者との間に特別な関係がある理解して、パウロによって洗礼を受けた人々がいたずらに誇ることがないためだろう。またパウロが回心者を自分にひきつけようとしているという誤解を避けるためとも考えられる。

- ・「クリスポ」は回心前はコリントのユダヤ人の会堂の管理者で、一家をあげて主を信じるようになった人物(使徒言行録 18 : 8)。「ガイオ」はパウロとコリント教会の家主(ローマの信徒への手紙 16 : 23)。「ステファナの家の人たち」はコリントの信徒への手紙一 16 : 15 で「アカイア州の初穂」と紹介されている。1 : 14~16 の書き方から見て、ステファナの家族が洗礼を受けたのは、パウロのコリント宣教前か。

○「キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしいものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。」(17 節)

- ・上記の言葉は、パウロが洗礼を軽視していたことを意味しない。おそらくパウロの協力者の誰かが洗礼を授けたのだろう。パウロ自身の使命の中心は「福音を告げ知らせる」ことであった。彼は回心の時からこの使命をはっきりと自覚していた。そしてコリントばかりでなく、あらゆる場所でこの使命を果たし続けてきたのである。
- ・「言葉の知恵によらないで」と、パウロは福音宣教の方法を自覚的に選んだことを特に強調する。その目的は当時のギリシア・ローマ世界を遍歴していた哲学者、宗教家と同一視されないようにというばかりではない。それはまたキリストの十字架の死を軽視して、知恵を主張しようとしているコリント教会の一部の人々の動きに対する攻撃ともなっている。パウロの最大の関心はキリストの十字架が現実的な力として明確に提示され、人々の中に救いの実を結ぶことであった。以上のような使命観に立つパウロにとって、コリント教会のある人々がキリストの十字架を誤解したり軽視したりして、教会の中に仲間割れや争いを生じさせるのを決して見逃すことはできないのである。

○今日の聖書箇所から思うこと

- ・パウロの時代においても教会には仲間割れや争いがあったことが分かる。おそらくこうしたことはいつの時代の教会においても付きまとうものだろう。教会は外からの迫害には案外強いが、内側から崩れやすい。その意味では、教会を破壊するのは人間のエゴであると言えるかもしれない。エゴに陥っている人ほど自らのエゴに気づかないものであるが、常にしっかりと自分をふりかえり、エゴに気をつけていきたいと願う。